

える側も自分の仕事を見直すよい機会になり、再勉強し、成長すると思いません。私もNMRに関する業務の引き継ぎを行いました。それまでなんとなく行っていた業務を整理したり、NMRについて勉強し直したり、教えるペースが早すぎて相手に伝わっていないことに気づかされたり、慣れないことの連続でしたが、引継ぎというのも1つの大きな勉強でした。また、人が出ていくことで、その人に任せていた仕事を残された人がやらなくてはならなくなります。それも1つ新しいことを習得する機会でもあるし、同じ仕事も別の人がやることで見直しはされ、よりよいものになる可能性を秘めています。また、ずっと同じ環境にいると当たり前前に思っただけで気づかないことも、異動した人にとっては新鮮で、なぜ?とかもつ

とこうの方がいいのではないかと、前の部署ではこうだった、といった異なる意見・提案が生まれます。同じ環境にいた人の新しい意見よりも、新しく入った人の新しい意見・考え方のほうが受け入れやすく、その時代にあったものへ変えていくチャンスを生み出すのではないかと思います。

もちろん習得するのに20年30年かかる技術もありますし、1つのことを極め続けることも技術者として重要ですから、すべての人を無理に異動させる必要はないと思います。ですが、技術課にも全体を見渡してマネジメント出来る人も必要で、そういった人を育てるには異動も必要だと思います。そこで得られるものは、専門技術だけではなく、仕事への取り組み方や多様な考え方ではないかと思います。

## 最後に

現在は主に3Dプリンタを使用してタンパク質などの模型製作を行っています。技術課のメンバー5名で始まった3Dプリンタ造形技術育成プロジェクトを通して、いろいろな大きさや形の模型製作に対応できるようになってきました。今後も様々な造形にチャレンジし、装置開発室に既存の機械工作技術等ともコラボレーションすることで、3Dプリンタの活用の幅を広げていけるよう努力していきたいと思っています。

## 覽古考新07 | 1998年

この分子研には優秀な研究者が蠅集し、世界に注目される成果を挙げてきたことは誰の目にも明らかである。また、分子科学研究所の果たした大きな貢献として、助教授クラスの若い研究者を多く育てたことを挙げたい。彼らは現在分子科学分野の中核として活躍している。

分子科学で最先端のトピックスとして研究されてきた対象は時々刻々変化し、創立当時に取り扱われていた研究テーマもここ数年の間大きな変化があると予想される。必ずしも王道を行くような研究テーマではなくてもよいから、この研究所でしか出来ないような冒険的な研究に挑戦して戴きたいと希望している。

.....

新しい画期的な考えをする人を選び、その人にすべてお任せするしかない。少しは不確定要素があっても、画期的な着想を持つ人を選べば、自然に素晴らしい成果が挙がるという考え方は極論であろうか。

分子科学研究所が強力な研究機関としてこれからも活躍し、また独立した若手の人材を分子科学の中核研究者に育てて世に送り出す役割も同時に果たしていかれることを祈念している。

分子研レターズ No.37 巻頭言「分子科学研究所 2010年」(1998年)  
近藤保 (東京大学名誉教授)